

### 「3 外出中に大地震が起こったら」

- 学習のねらい： 1. 屋外で、どのような危険が起こるかを理解できる。  
 2. 状況ごとの適切な危険回避の方法を理解できる。  
 3. 通学経路上で被災した場合の避難場所や避難時に注意すべきことを理解できる。

（指導上のポイント）

- ◆生徒が危険と考えた理由についても発表させる。
- ◆地震発生時の初期対応として「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所を見つけ出して、すばやく身を寄せ、適切な方法で自分の命を守ることを指導する。

《参考》

○写真以外に起こり得る危険

【屋外】

家の屋根・壁の剥落、石垣やブロック塀の崩落、自動販売機の転倒、階段からの転落、切れた電線による感電、家屋の倒壊、火災・爆発、液状化 など

【屋内】

時計や照明、天井材など非構造部材の落下、商品棚の転倒、防火扉の損壊、電車の急ブレーキや脱線、トンネルの崩壊、火災発生 など

（議論のポイント）

地域防災訓練に家族と参加、被災地を訪問し還流報告、被災地復興イベント企画 など

**3 外出中に大地震が起こったら**

(1) 屋外での危険と回避方法

あなたの通学経路やよく行く場所について、どのような危険があるか、写真を参考に考えて書いてください。また、危険の避け方も書きましょう。

場所	考えられる危険	危険の避け方
例) ○○駅	パニックになった人たちが出口に集中するのに巻き込まれる。 線路に落ちる。	大きな柱の近くや広い場所に移動して、揺れが収まるまでそこにいる。
バス	車内で転倒し、けがをする。	つり革や手すりにつかまる。乗務員の指示に従う。
デパート	窓ガラスが落下する。 陳列品が飛散する。	カバンなどで頭を守る。係員の指示に従う。
映画館	照明器具が落下し、多数の人がパニックになる。	座席を上げてしゃがみ、カバンなどで頭を守る。係員の指示に従う。
エレベーター	エレベーターが停止し、閉じ込められる。	全ての階のボタンを押すか、非常用ボタンを押す。落ち着いて救出を待つ。

話し合ってみよう!

平成30年度防災に関する県民意識調査(三重県)では、「東日本大震災発生時に危機意識を持ち、その後、時間の経過とともに危機意識が薄れてきたが、近年頻発する地震により、再び高まった」と

《重要》外出先で考えられる危険回避方法

地域や場所により考えられる危険はさまざまだが、以下の原則を守るよう指導する。

- ①危険が考えられる場所から離れる。
- ②駐車場など広い空間へ逃げ、カバンなどで頭を守る、だんごむしのポーズをとるなどの体勢をとる。
- ③揺れそのものだけでなく、続いて起こり得る火災、パニックになった群集、停電で信号が停止し、混乱する車等にも注意する。
- ④係員や車掌の誘導、館内アナウンス、誘導灯・誘導標識に従う。流言飛語に浮足立たない。
- ⑤津波の恐れがある地域では、揺れがおさまったらすぐに高台などへ逃げる。

関連学習：ワークシート③

「家から避難場所への経路を確認する」

ワークシート④

「家族の避難先を知って、連絡を取る」

(2) 通学経路での安全な場所と避難行動

あなたの通学経路の近くにある「安全と思われる場所」とその理由を書いてください。また、揺れが収まった後の行動も書きましょう。

場所	安全と思う理由	揺れが収まった後の行動
例) 〇〇工場の駐車場	広くて、 周りに何もない。	近くの △△小学校へ行く。
〇〇公園	避難場所に指定されている。	津波の心配はないため、 高校へ向かう。
〇〇ビル前広場	津波避難ビルに指定されている。	津波警報が発表されたのでビルで待機。
〇〇運動場	広くて、安全である。	余震が続いて起こるので、 気をつけて家に帰る。

※公共交通機関を利用する人は、最も利用する交通手段について、調べてみましょう。

交通機関名	地震時の対応	揺れが収まった後の行動
〇〇鉄道	つり革や手すりにつかまる。乗務員の指示に従い避難する。	携帯ラジオで津波の心配はないと放送を聞き、高校へ向かう。

ヒント

例に対して「安全」が、によって、考え方を考える必要があります。津波が来る恐れのある場合、まず揺れから身を守り、その後すく高いところへ避難すること、また、大きな地震が起きて避難した後、さらに大きな地震が発生することも想定して次の行動を考えるなど、二段階の対応をしましょう。



対策

大規模災害時は、通信全線に規制がかかりますので、災害用伝言ダイヤル(171)を利用しましょう。また、家族と、災害時の避難先やお互いの連絡手段を話し合っておきましょう。

(3) 出かけた先で大地震が起こったら

修学旅行や部活動などで、普段訪れない土地に行った際に、大地震が起こった場合どうしますか。無事に家に帰るまでを考えてみましょう。

- ・ 引率の教師、施設の係員、当該地域の防災機関等の指示に従い、避難場所をめざす。
- ・ 災害用伝言ダイヤル(171)などにより、家族や関係者に連絡を行う。
- ・ 天候や気温等にも気を配り、体力を温存しながら、パンクに巻き込まれぬよう、秩序正しく公共交通機関の回復を待つ。

(指導上のポイント)

◆通学路付近での避難場所(家と学校以外)を書かせ、地震後の街の被害も念頭に置きながら、その後の行動も書かせる。

◆巨大地震が発生すると、沿岸部への津波の襲来や余震による家屋倒壊などの2次被害の可能性があるので、早い段階から命を守る行動を取る必要があることを指導する。

◆時間があれば、通学以外で公共交通機関に乗車している時の地震にどう対応するかを考えさせる。

◆津波浸水が予測される地域では、津波浸水予測範囲

(参照：三重県防災対策部HP

[http://www.bosaimie.jp/resource/1495426761000/X\\_MIE\\_ne000](http://www.bosaimie.jp/resource/1495426761000/X_MIE_ne000))で、

津波の浸水地域を示し、「ここまで津波が来るかもしれない」と説明する。予測は、あくまで一つの目安なので、「ここから先は大丈夫」と考えず、とにかく地震発生時には、川や海に近づかないように指導する。

(指導上のポイント)

◆全国どこでも地震が発生する可能性があるため、地震から自分の身を守るため、前ページの危険回避方法を理解しておくよう指導する。

◆連絡先や集合場所等を家族で話し合っておくことを指導する。

(確認)

危険を知り、適切な回避行動を考えておく必要があることを理解できたか。

(次年度以降の展開例)

- ・ 通学路(または学校や自宅の周辺)の地図を用意し、どのような危険が発生するかを考えさせる。
  - ・ 登下校時の避難行動の訓練や防災タウンウォッチングの際に活用する。
- などが考えられる。